

日蓮聖人遺文における「開拓」の文字について

庵 谷 行 亨

一 はじめに

『観心本尊抄副状』真蹟第一紙七行目の、『昭和定本日蓮聖人遺文』が「開拓」と表記している文字⁽¹⁾について、令和三年一〇月一八日に中尾堯先生から「開拓」と読むべきであるとのことご教示をいただいた。

おりしも、筆者は日蓮宗新聞に『観心本尊抄』の世界⁽²⁾を連載中であることや、それを纏めて書籍として刊行するために編集にあたっていたこともあり、早速に確認したところ、筆者もそのように読むことが適切であると思えた。

また『観心本尊抄』真蹟第七紙表二行目⁽²⁾にも同じ文字が用いられていることから、こちらも「開拓」に訂正する必要があると思われる。

以上のことから、「日蓮聖人『観心本尊抄』述作七五〇年」を記念して、令和四年四月二五日に日蓮宗新聞社から刊行される拙著『観心本尊抄』の世界⁽²⁾上巻では、当該文字を「開拓」と表記した。その経緯については同書の凡例に付記した。

日蓮聖人遺文における「開拓」の文字について（庵谷行亨）

その後、令和三年二月一〇日に発行された『法華』誌所収の「聖教殿の日蓮聖人ご真蹟④」において、中尾堯先生は『観心本尊抄』本文（真蹟第七紙表二行目）と『観心本尊抄副状』（真蹟第一紙七行目）の当該文字について、共に「開拓」とし「かいせき」とふりがなを付し、「奥深い石蔵の扉を開くという意味」と解説されている。³⁾

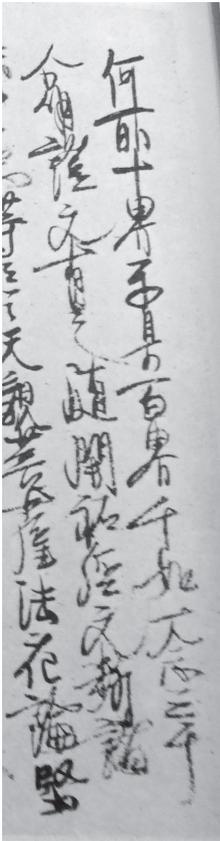
なお、『曾谷入道殿許御書』真蹟第一二紙三行目にも同じ文字が用いられている。⁴⁾

本稿では、真蹟文字の確認に加えて、いくつかの『日蓮聖人遺文集』と『日蓮聖人遺文解説書』を参照し、当該文字の判読について改めて検討してみたい。

二 真蹟の文字

1 『観心本尊抄』の真蹟文字

『観心本尊抄』真蹟第七紙表二行目の当該文字は次のように書かれている。⁵⁾

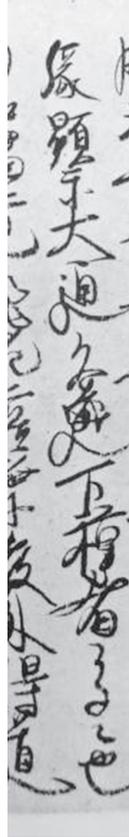


図版1「開●」『観心本尊抄』真蹟第七紙表二行目（『真蹟集成』第四卷二三頁二行目）『昭定』七〇八頁八行目・真。

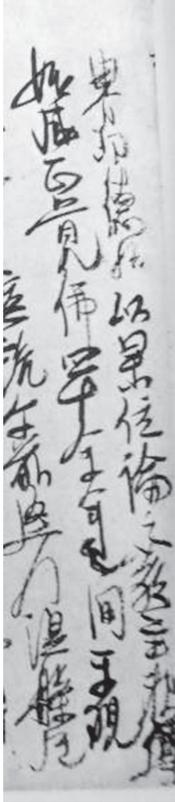
示偏に石、衣偏に石、または手偏に石のように読める。示偏に石は「祐」、衣偏に石は「拓」、手偏に石は「拓」である。

当該文字を『観心本尊抄』真蹟に見られる「示」の文字(図版2⁶)と比較すると、当該文字は示偏の「拓」に近いように思われる。

図版2の①「顕示」『観心本尊抄』真蹟第五紙表九行目(『真蹟集成』第四卷九頁九行目)

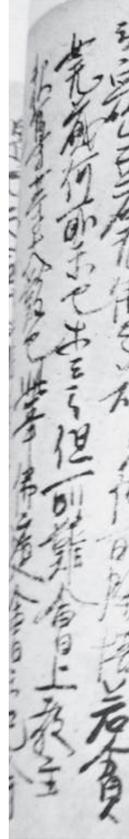


図版2の②「示現」『観心本尊抄』真蹟第六紙表二行目(『真蹟集成』第四卷一頁二行目)

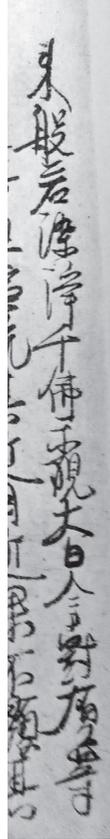


日蓮聖人遺文における「開拓」の文字について（庵谷行亨）

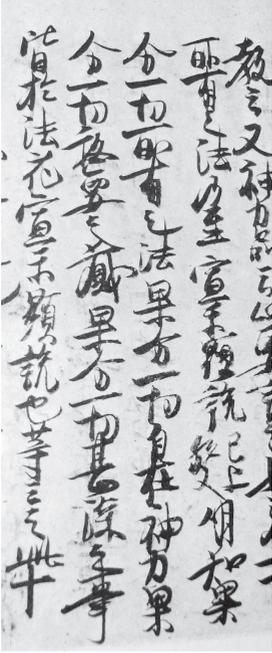
図版2の③「示」『観心本尊抄』真蹟第七紙裏一七行目（『真蹟集成』第四卷一四頁一七行目）



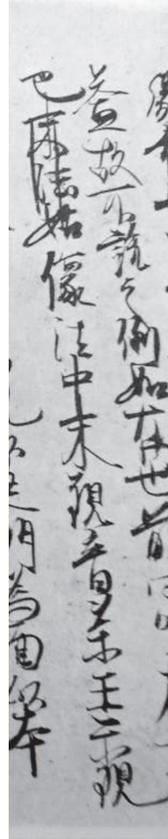
図版2の④「示現」『観心本尊抄』真蹟第九紙表一行目（『真蹟集成』第四卷一七頁一行目）



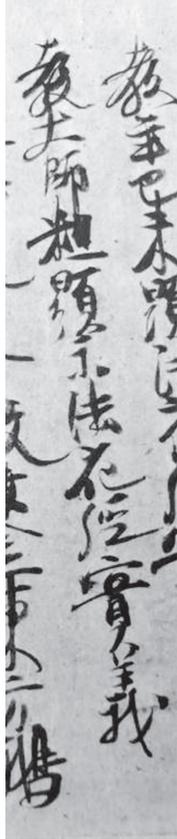
図版2の⑤「宣示」『観心本尊抄』真蹟第一四紙裏九行目（『真蹟集成』第四卷二八頁九行目）、⑥「宣示」第一四紙裏二二行目（『真蹟集成』第四卷二八頁二二行目）



図版2の⑦「示現」『観心本尊抄』真蹟第一六紙表三行目（『真蹟集成』第四卷三一頁三行目）



図版2の⑧「顕示」『観心本尊抄』真蹟第一七紙表七行目（『真蹟集成』第四卷三三頁七行目）



当該文字を衣偏の「祐」であるとする、『観心本尊抄』真蹟の「被」（図版3）⁷、『観心本尊抄副状』真蹟の「被」（図版4）⁸の衣偏と近いようにも思われる。⁹

松本慈恵編『日蓮聖人書体字典』¹⁰・川澄勲編『仏教古文書字典』¹¹・同編『日蓮大聖人用字集』¹²は共に衣偏の「祐」としている。

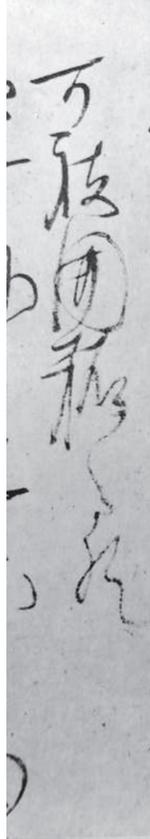
日蓮聖人遺文における「開祐」の文字について（庵谷行亨）

日蓮聖人遺文における「開拓」の文字について（庵谷行亨）

図版3 「被」 『観心本尊抄』 真蹟第四紙表一〇行目（『真蹟集成』 第四卷七頁一〇行目）



図版4 「被」 『観心本尊抄副状』 真蹟第一紙七行目（『真蹟集成』 第四卷三五頁七行目）

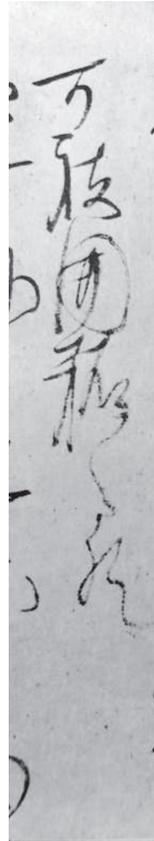


「拓」の用例は日蓮聖人の『貞観政要』写本に見られるが、⁽¹³⁾『観心本尊抄』真蹟の当該文字とは筆づかいが異なる。

2 『観心本尊抄副状』の真蹟文字

『観心本尊抄副状』真蹟第一紙七行目の当該文字は次のように書かれている（図版5）⁽¹⁴⁾。

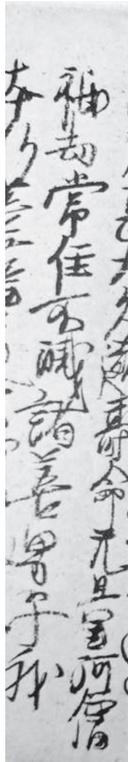
図版5 「開●」『観心本尊抄副状』真蹟第一紙七行目（『真蹟集成』第四卷三五頁七行目）*前掲図版4と同じ



示偏に石、衣偏に石、手偏に石、または木偏に石のように読める。木偏に石は「柘」である。

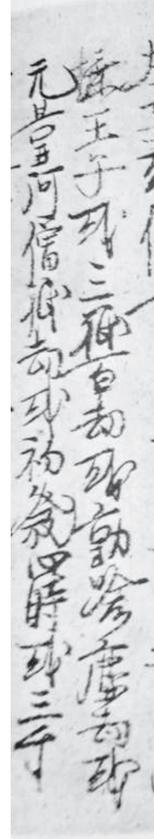
当該文字を示偏の「柘」であるとする、『観心本尊抄』真蹟の「柘」（図版6）¹⁵、『観心本尊抄副状』真蹟の「柘」（図版7）¹⁶等の示偏と近似している。¹⁷

図版6の①「柘」『観心本尊抄』真蹟第三紙表一三行目（『真蹟集成』第四卷五頁一三行目）

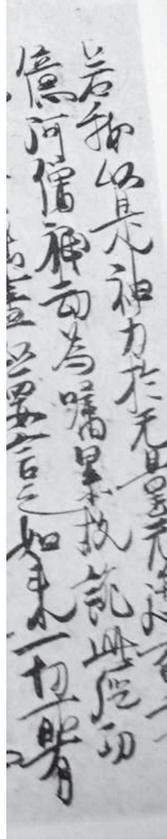


日蓮聖人遺文における「開拓」の文字について（庵谷行亨）

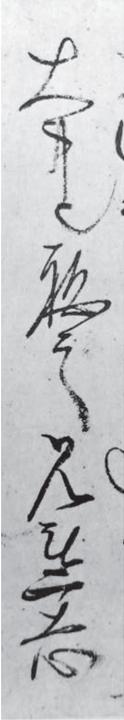
図版6の②「祇」『観心本尊抄』真蹟第五紙裏一六行目（『真蹟集成』第四卷一〇頁一六行目）、③「祇」第五紙裏一七行目（『真蹟集成』第四卷一〇頁一七行目）



図版6の④「祇」『観心本尊抄』真蹟第一四紙裏二行目（『真蹟集成』第四卷二八頁二行目）

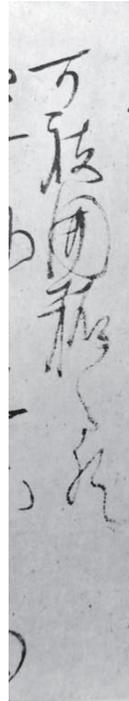


図版7「祕」『観心本尊抄副状』真蹟第一紙六行目（『真蹟集成』第四卷三五頁六行目）



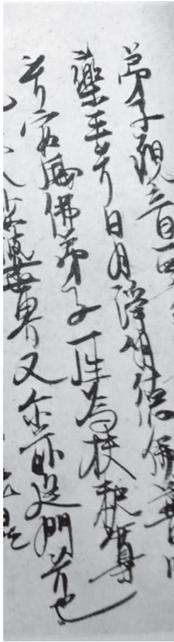
当該文字を衣偏の「柘」であるとすると、『観心本尊抄副状』真蹟の「被」(図版4)⁽¹⁸⁾の衣偏と近似している。川澄勲編『仏教古文書字典』は『観心本尊抄』の文字と同様に、衣偏の「柘」としている。⁽¹⁹⁾

図版4「被」『観心本尊抄副状』真蹟第一紙七行目(『真蹟集成』第四卷三五頁七行目) *前掲図版5と同じ



手偏の「拓」は『観心本尊抄』真蹟の「扶」(図版8)⁽²⁰⁾等の手偏の用例と比較すると可能性が低いように思われる。

図版8「扶」『観心本尊抄』真蹟第一四紙表三行目(『真蹟集成』第四卷二七頁三行目)

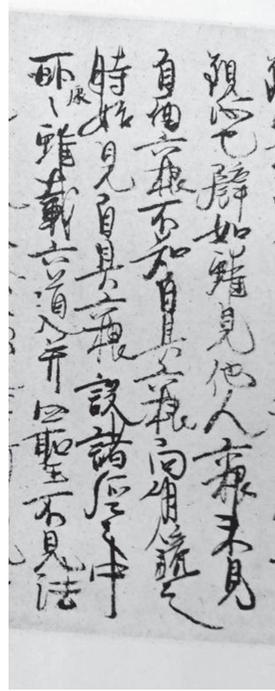


木偏の「柘」も『観心本尊抄』真蹟の「根」(図版9)⁽²²⁾等の木偏の用例と比較すると可能性が低いように思われる。

日蓮聖人遺文における「開柘」の文字について(庵合行亭)

日蓮聖人遺文における「開拓」の文字について（庵谷行亨）

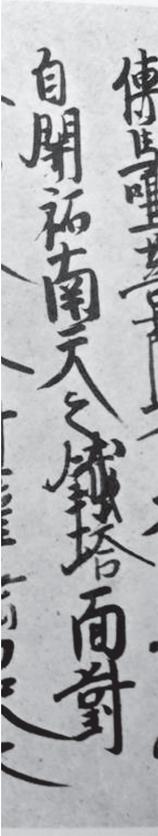
図版9の①「根」「観心本尊抄」真蹟第三紙表二行目（『真蹟集成』第四卷五頁二行目）、②「根」第三紙表三行目（『真蹟集成』第四卷五頁三行目）、③「根」第三紙表四行目（『真蹟集成』第四卷五頁四行目）



3 『曾谷入道殿許御書』の真蹟文字

『曾谷入道殿許御書』真蹟第一二紙三行目の当該文字は次のように書かれている（図版10）²⁴。

図版10「開●」『曾谷入道殿許御書』真蹟第一二紙三行目（『真蹟集成』第一卷一三頁三行目）



示偏に石、または衣偏に石のように読める。日蓮聖人真蹟文字の示偏と衣偏は極めて近似している。

当該文字を示偏の「祐」とすると、『観心本尊抄』真蹟の「禮」(図版11)⁽²⁵⁾、「神」(図版12)⁽²⁶⁾、『曾谷入道殿許御書』真蹟の「祇」(図版13)⁽²⁷⁾、「神」(図版14)⁽²⁸⁾、「福」(図版15)⁽²⁹⁾等に見られる示偏の用例に近いと思われる。⁽³⁰⁾

図版11「禮」『観心本尊抄』真蹟第二二紙表三三行目(『真蹟集成』第四卷三三頁一三行目)



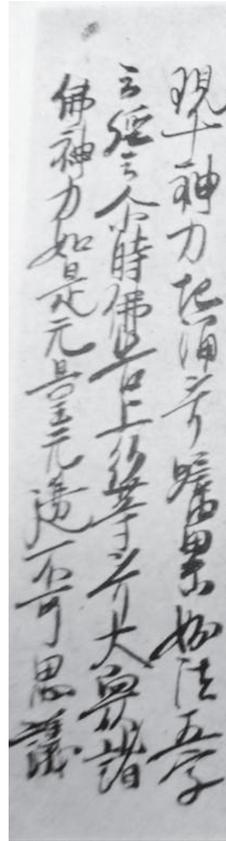
図版12の①「神」『観心本尊抄』真蹟第一三紙裏七行目(『真蹟集成』第四卷二六頁七行目)



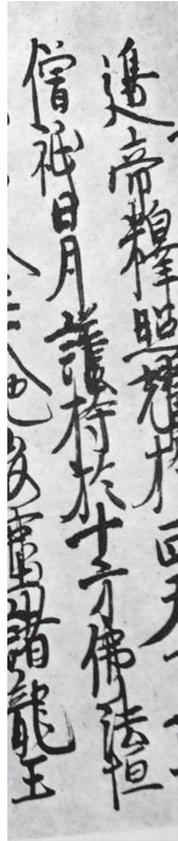
日蓮聖人遺文における「開祐」の文字について(庵谷行亨)

日蓮聖人遺文における「開拓」の文字について（庵谷行亨）

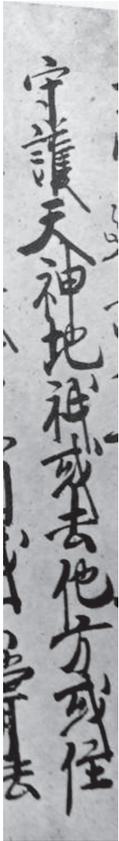
図版12の②「神」『観心本尊抄』真蹟第一四紙表一五行目（『真蹟集成』第四卷二七頁一五行目）、③「神」第一四紙表一七
行目（『真蹟集成』第四卷二七頁一七行目）、



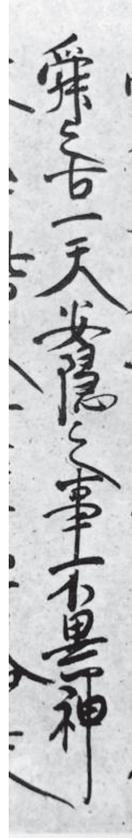
図版13の①「祇」『曾谷入道殿許御書』真蹟第一九紙四行目（『真蹟集成』第一卷二〇頁四行目）



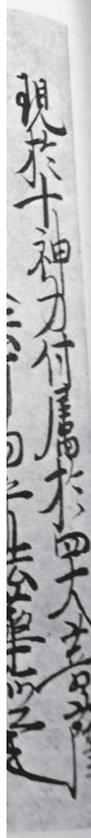
図版13の②「祇」『曾谷入道殿許御書』真蹟第二四紙三行目（『真蹟集成』第一卷二五頁三行目）



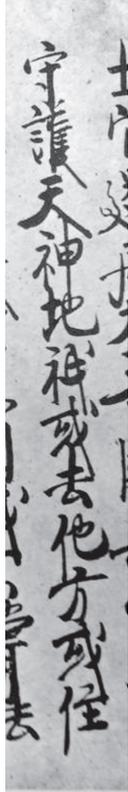
図版14の①「神」『曾谷入道殿許御書』真蹟第二二紙七行目（『真蹟集成』第一卷二二頁七行目）



図版14の②「神」『曾谷入道殿許御書』真蹟第二二紙一行目（『真蹟集成』第一卷三三頁一行目）



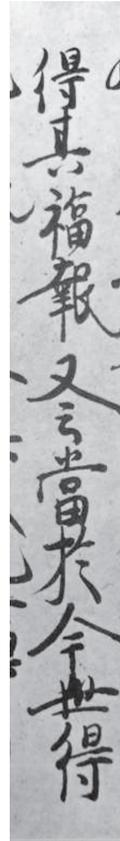
図版14の③「神」『曾谷入道殿許御書』真蹟第二四紙三行目（『真蹟集成』第一卷二五頁三行目）



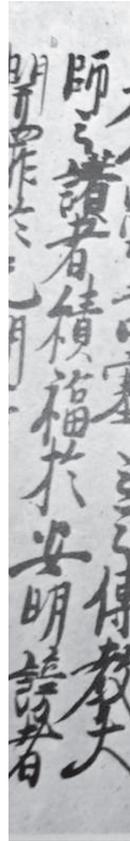
日蓮聖人遺文における「開拓」の文字について（庵谷行亨）

日蓮聖人遺文における「開拓」の文字について（庵谷行亨）

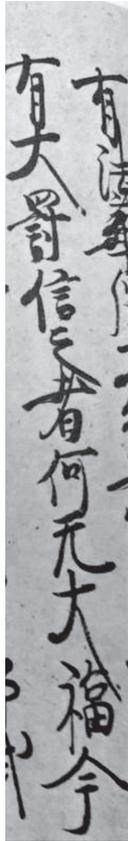
図版15の①「福」『曾谷入道殿許御書』真蹟第四二紙（下巻第一六紙）八行目（『真蹟集成』第一卷四三頁八行目）



図版15の②「福」『曾谷入道殿許御書』真蹟第四二紙（下巻第一六紙）一五行目（『真蹟集成』第一卷四三頁一五行目）



図版15の③「福」『曾谷入道殿許御書』真蹟第四四紙（下巻第一八紙）二行目（『真蹟集成』第一卷四五頁二行目）



また、当該文字を衣偏の「衤」とすると、『観心本尊抄』真蹟の「被」（図版3³¹）、『曾谷入道殿許御書』真蹟の「被」（図版16³²）等に見られる「衣」偏の用例に近いと思われる。

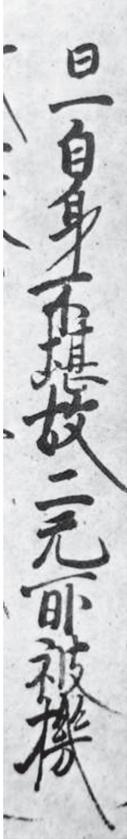
図版3 「被」 『観心本尊抄』 真蹟第四紙表一〇行目（『真蹟集成』 第四卷七頁一〇行目）



図版16の① 「被」 『曾谷入道殿許御書』 真蹟第四紙八行目（『真蹟集成』 第一卷五頁八行目）



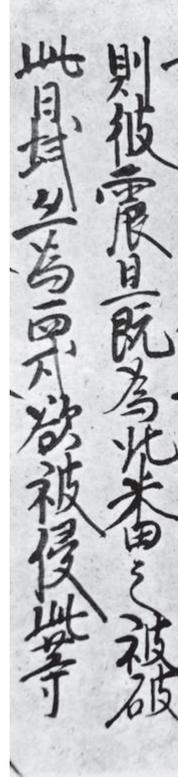
図版16の② 「被」 『曾谷入道殿許御書』 真蹟第一一紙九行目（『真蹟集成』 第一卷二二頁九行目）



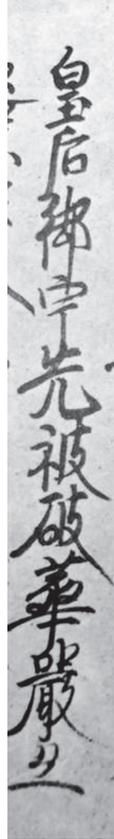
日蓮聖人遺文における「開拓」の文字について（庵谷行亨）

日蓮聖人遺文における「開拓」の文字について（庵谷行亨）

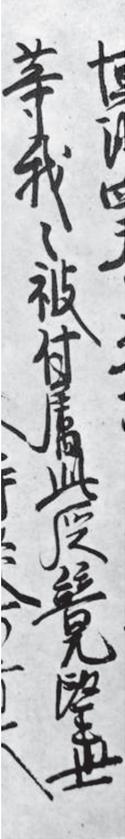
図版16の③「被」『曾谷入道殿許御書』真蹟第二三紙一〇行目（『真蹟集成』第一卷一四頁一〇行目）、④「被」第二三紙一行目（『真蹟集成』第一卷一四頁二一行目）



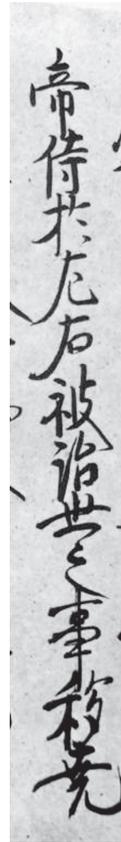
図版16の⑤「被」『曾谷入道殿許御書』真蹟第一四紙一〇行目（『真蹟集成』第一卷一五頁一〇行目）



図版16の⑥「被」『曾谷入道殿許御書』真蹟第一九紙六行目（『真蹟集成』第一卷二〇頁六行目）



図版16の⑦「被」『曾谷入道殿許御書』真蹟第二一紙六行目（『真蹟集成』第一卷二二頁六行目）



このように、日蓮聖人真蹟文字の示偏と衣偏は極めて近似していることから、当該文字は「祐」と「祐」のどちらにも判読できる可能性が高いことが分かる。

三 『日蓮聖人遺文集』の文字

各種の『日蓮聖人遺文集』において、当該文字がどのように表記されているかについて確認しておきたい。

1 『観心本尊抄』の文字

おもな『日蓮聖人遺文集』における『観心本尊抄』第七紙表二行目の当該文字⁽³⁴⁾について確認する。

『観心本尊抄』の本文は、『昭和定本日蓮聖人遺文』によると次のとおりである。

其上捨_レ多付_レ小法華經文分明少有_レ持怙_レ法華經文何所十界互具・百界千如・一念三千分明証文有_レ之。随開_レ祐_レ經文_レ断諸法中惡等_レ云云。⁽³⁵⁾

本文の概要は次のとおりである。「そのうえ、仏が長年の間に説かれた多くの經典を捨て去り、説法の期間や經典教

日蓮聖人遺文における「開祐」の文字について（庵谷行亨）

の少ない法華經に依るとしても、法華經の文に十界互具が明らかに説かれているのならば少しはたのみとすることもできるであろう。しかしながら法華經の文のどこに十界互具・百界千如・一念三千が説かれているという明確な証文があるのか。それどころか法華經の文を開き見ると、法華經の方便品に「諸法の中の悪を断じる」と説かれている。

本文は、第一八番問答の問文の一部で、問者が法華經方便品の「断諸法中惡」の文を挙げて、「法華經には、十界互具が説かれていないどころか、むしろ、諸法の中の悪を断じるとあり、十界互具を否定しているではないか」と論難する文章である。問者にとって、「断諸法中惡」は「法華經に十界互具・百界千如・一念三千が説かれていない」ことを証明する決定的な經文であったことから、日蓮聖人は問者の言にこの語句を使われたものと思われる。³⁶ 第一八番問答の答文では、答者は「但可_レ会断諸法中惡經文也₃₇」と、特段にこの問題を取り上げ、法華經の方便品・天台大師の『法華玄義』・章安大師の『観心論疏』の文を挙げて、法華經における十界互具・一念三千を論証している。問者が疑難を証明するために挙げた「断諸法中惡」の經文は、かえって、法華經の十界互具・一念三千をさらに強固に論証する契機となることが分かる。

この文章の「開拓」の文字について、おもな『日蓮聖人遺文集』を確認すると次のとおりである。

(1) 加藤文雅編『日蓮聖人御遺文』日宗社発行（明治三七年八月二八日）九三五頁³⁸

「開拓」と表記されている。本書に脚注は無い。

(2) ①田中巴之助『再訂照校類纂高祖遺文録』（第六版）師子王文庫発行（大正六年五月二二日）〈読み下し文〉九〇頁³⁹

「開拓」と表記し「カイクタク」と読みがなが付されている。本書に脚注は無い。

(2) ②櫻井智堅監修『類纂日蓮聖人遺文集』平成版 本化妙宗聯盟発行(平成二年六月四日)〈読み下し文〉八六頁⁽⁴⁰⁾

「開拓」と表記されている。本書に脚注は無い。

(3) 浅井要麟編『昭和新修日蓮聖人遺文全集』平樂寺書店発行(昭和九年)〈読み下し文〉九五〇頁⁽⁴¹⁾

「開拓」と表記されている。本書に脚注は無い。

(4) ①立正大学日蓮教学研究所編『昭和定本日蓮聖人遺文』身延山久遠寺発行(初版・昭和二十七年一月一日)七〇八頁⁽⁴²⁾

本文中は「開拓」と表記し、脚注に「拓_レ拓_レ眞」と記載されている。

真蹟の文字を「開拓」と判読し、編集において本文を「開拓」としたことが分かる。

(5) 立正安国会編『日蓮大聖人御真蹟対照録』立正安国会発行(昭和四二年八月一日)中巻一一頁⁽⁴³⁾

「開拓」と表記されている。脚注の記載は無い。

(4) ②立正大学日蓮教学研究所編『昭和定本日蓮聖人遺文』身延山久遠寺発行(改訂増補版・昭和六三年一月二三日)七〇八頁⁽⁴⁴⁾

「開拓」と表記されている。脚注の記載は無い。

(4) ③立正大学日蓮教学研究所編『昭和定本日蓮聖人遺文』身延山久遠寺発行(改訂増補第三刷〈訂正版〉・平成二年四月二八日)七〇八頁⁽⁴⁵⁾

「開拓」と表記されている。脚注の記載は無い。

日蓮聖人遺文における「開拓」の文字について(庵谷行亨)

日蓮聖人遺文における「開拓」の文字について（庵谷行亨）

(6) 米田淳雄編『平成新修日蓮聖人遺文集』連紹寺不軽庵発行（平成六年一〇月一三日〈読み下し文〉）三〇〇頁⁽⁴⁶⁾
「開拓」と表記されている。本書に脚注は無い。巻末の「校訂表」に記載は無い。

(7) 阿部日顕監修『平成校定日蓮大聖人御書』第一巻 大石寺発行（平成一四年四月二八日）七五五頁⁽⁴⁷⁾
本文中は「開拓」と表記し、脚注に「拓_ニ拓_ニ真_ニ」と記載されている。

(8) ①立教開宗七百五十年慶讃会『日蓮宗電子聖典』日蓮宗宗務院発行（平成一四年二月八日）⁽⁴⁸⁾
「開拓」と表記されている。

(8) ②宗祖降誕八百年慶讃事業広報出版部会『日蓮宗 新・電子聖典』日蓮宗宗務院発行（令和三年九月）⁽⁴⁹⁾
「開拓」と表記されている。

2 『観心本尊抄副状』の文字

おもな『日蓮聖人遺文集』における『観心本尊抄副状』真蹟第一紙七行目の当該文字⁽⁵⁰⁾について確認する。

『観心本尊抄副状』の本文は、『昭和定本日蓮聖人遺文』によると次の通りである。

此事日蓮当身大事也。秘_レ之見_ニ無_ニ志_ニ可_レ被_レ開_ニ拓_ニ之_ニ歟₍₅₁₎。

本文の概要は次の通りである。「このことは日蓮の身命にかかわる重大な法門です。この教えは秘密にして、堅固な信心と志念を有した人であることを確認したうえで開き見せてください。」

文章の内容は、『観心本尊抄』所述の教えは「日蓮当身の大事」たる「最重要法門」であるため、「これを秘」し、「無_ニ一_ニの志_ニ」を確認してから「開き見せる」ことを厳命されたものである。「開き見せる」内容が極めて重大であるた

めに、日蓮聖人は意図的にこの文字を使用したのではないかと思われる。『観心本尊抄』所述の「観心法門」の重要性については、『三澤鈔』にも「さどの国より弟子どもに内々申法門あり」「此大法」⁽³²⁾と述べられている。⁽³³⁾

(1) 加藤文雅編『日蓮聖人御遺文』日宗社発行(明治三十七年八月二十八日)九五七頁

「開拓」と表記されている。本書に脚注は無い。

本遺文集は、『観心本尊抄』『観心本尊抄副状』共に「開拓」と表記している。

(2) ①田中巴之助『再訂照校類纂高祖遺文録』(第六版)師子王文庫発行(大正六年五月二二日)〈読み下し文〉一〇五頁

「開拓」と表記し「カイタク」と読みがなが付されている。本書に脚注は無い。

本遺文集は、『観心本尊抄』『観心本尊抄副状』共に「開拓」と表記し「カイタク」と読みがなを付している。

(2) ②櫻井智堅監修『類纂日蓮聖人遺文集』平成版 本化妙宗聯盟発行(平成二二年六月四日)〈読み下し文〉一〇一頁

「開拓」と表記されている。本書に脚注は無い。

本遺文集は、『観心本尊抄』『観心本尊抄副状』共に「開拓」と表記している。

(3) 浅井要麟編『昭和重修日蓮聖人遺文全集』平楽寺書店発行(昭和九年)〈読み下し文〉九六六頁

「開拓」と表記されている。本書に脚注は無い。

本遺文集は、『観心本尊抄』『観心本尊抄副状』共に「開拓」と表記している。

(4) ①立正大学日蓮教学研究編『昭和定本日蓮聖人遺文』身延山久遠寺発行(初版・昭和二十七年一〇月一〇日)七

日蓮聖人遺文における「開拓」の文字について(庵谷行亨)

日蓮聖人遺文における「開拓」の文字について（庵谷行亨）

二二頁

「開拓」と表記されている。脚注の記載は無い。

本遺文集は、『観心本尊抄』は「開拓」と表記し脚注に「拓＝拓^⑧」と記載しているが、『観心本尊抄副状』では「開拓」と表記するのみで脚注に記載がない。

(5) 立正安国会編『日蓮大聖人御真蹟対照録』立正安国会発行（昭和四二年八月一日）中巻一〇三頁

「開拓」と表記されている。脚注の記載は無い。

本遺文集は、『観心本尊抄』『観心本尊抄副状』共に「開拓」と表記している。

(4) ②立正大学日蓮教学研究所編『昭和定本日蓮聖人遺文』身延山久遠寺発行（改訂増補版・昭和六三年一〇月三日）七二二頁

「開拓」と表記されている。脚注の記載は無い。

本遺文集は、『観心本尊抄』『観心本尊抄副状』共に「開拓」と表記している。

(4) ③立正大学日蓮教学研究所編『昭和定本日蓮聖人遺文』身延山久遠寺発行（改訂増補第三刷〈訂正版〉・平成二年四月二八日）七二二頁

「開拓」と表記されている。脚注の記載は無い。

本遺文集は、『観心本尊抄』『観心本尊抄副状』共に「開拓」と表記している。

(6) 米田淳雄編『平成新修日蓮聖人遺文集』連紹寺不軽庵発行（平成六年一〇月一三日）〈読み下し文〉三三四頁

「開拓」と表記されている。本書に脚注は無い。巻末の「校訂表」に記載は無い。

本遺文集は、『観心本尊抄』『観心本尊抄副状』共に「開拓」と表記している。

(7) 阿部日顕監修『平成校定日蓮大聖人御書』第一巻 大石寺発行(平成一四年四月二八日発行) 七六九頁
本文中は「開拓」と表記し、脚注に「拓_二拓_一」と記載されている。

本遺文集は、『観心本尊抄』『観心本尊抄副状』共に「開拓」と表記し、脚注に「拓_二拓_一」と表記している。

(8) ①立教開宗七百五十年慶讃会『日蓮宗電子聖典』日蓮宗務院発行(平成一四年一二月八日)

「開拓」と表記されている。

本聖典は、『観心本尊抄』では「開拓」、「観心本尊抄副状」では「開拓」と表記している。

(8) ②宗祖降誕八百年慶讃事業広報出版部会『日蓮宗新・電子聖典』日蓮宗務院発行(令和三年九月発行)

「開拓」と表記されている。

本聖典は、『観心本尊抄』では「開拓」、「観心本尊抄副状」では「開拓」と表記している。

3 『曾谷入道殿許御書』の文字

おもな『日蓮聖人遺文集』における『曾谷入道殿許御書』真蹟第一二紙三行目の当該文字⁽⁵⁾について確認する。

『曾谷入道殿許御書』の本文は、『昭和定本日蓮聖人遺文』によると次のとおりである。

問曰諸真言師云仏滅後相_二当於八百年_一龍猛菩薩出_二現於月氏_一釈尊顯教華嚴・法華等相_二伝馬鳴菩薩等_一大日密教自
開_二拓南天之鉄塔_一面对_二大日如来与_一金剛薩埵_二口_一決之。龍猛菩薩有_二二人弟子_一。提婆菩薩伝_二釈迦顯教_一龍智菩薩
授_二大日密教_一。龍智菩薩隱_二居阿羅苑_一不_レ伝_二於人_一。其間提婆菩薩所_レ伝顯教先渡_二於漢土_一。其後經_二歴於数年_一龍

日蓮聖人遺文における「開拓」の文字について(庵谷行亨)

日蓮聖人遺文における「開拓」の文字について（庵谷行亨）

智菩薩所_レ伝秘密之教善無畏・金剛智・不空渡_三於漢土_二等云云。⁵⁵⁾

本文の概要は次の通りである。「問うて言う。諸々の真言師が『仏の入滅後八百年にあたって龍猛菩薩が月氏に出現し、釈尊の説かれた顕教である華嚴経や法華経などを馬鳴菩薩等から相伝し、大日如来の説かれた密教を自ら南天竺の鉄塔を開いて、まのあたりに大日如来と金剛薩埵とから口決相承された。龍猛菩薩には提婆菩薩と龍智菩薩の二人の弟子があり、提婆菩薩には釈尊の説かれた顕教を伝え、龍智菩薩には大日如来の説かれた密教を授けた。龍智菩薩は阿羅苑に隠居して他の人に伝えなかつた。その間に提婆菩薩が伝受した顕教はまず漢土に伝えられた。その後数年を経て、龍智菩薩が伝受した密教を善無畏・金剛智・不空が漢土に渡した』と言っている。この説はどうであらうか。

本文は、正像末三時における仏法伝弘の次第を論ずる内、正法時の真言密教伝来について論じた問いの文章である。当該文字が使用されているのは、諸真言師の言として語られている「密教は、龍猛菩薩が南天竺の鉄塔を開いて大日如来と金剛薩埵とから直々に口決相承された」という文章中である。「龍猛菩薩の鉄塔相承」は、真言宗においては密教相承を証明する重要伝承であるため、この文字が使用されたものと思われる。⁵⁶⁾

(1) 加藤文雅編『日蓮聖人御遺文』日宗社発行（明治三七年八月二八日）一〇九九頁
「開拓」と表記されている。本書に脚注は無い。

本遺文集は、『観心本尊抄』『観心本尊抄副状』『曾谷入道殿許御書』共に「開拓」と表記している。

(2) ①田中巴之助『再訂照校類纂高祖遺文録』（第六版）師子王文庫発行（大正六年五月二二日）〈読み下し文〉三〇

五頁

「開拓」と表記し「カイクタク」と読みがなが付されている。本書に脚注は無い。

本遺文集は、『観心本尊抄』『観心本尊抄副状』『曾谷入道殿許御書』共に「開拓」と表記し「カイトク」と読みがなを付している。

(2) ② 櫻井智堅監修『類纂日蓮聖人遺文集』平成版 本化妙宗聯盟発行(平成二二年六月四日)〈読み下し文〉二九六頁

「開拓」と表記されている。本書に脚注は無い。

本遺文集は、『観心本尊抄』と『観心本尊抄副状』は「開拓」、『曾谷入道殿許御書』は「開拓」と表記している。

(3) 浅井要麟編『昭和新修日蓮聖人遺文全集』平楽寺書店発行(昭和九年)〈読み下し文〉一一〇八頁

「開拓」と表記されている。本書に脚注は無い。

本遺文集は、『観心本尊抄』『観心本尊抄副状』『曾谷入道殿許御書』共に「開拓」と表記している。

(4) ① 立正大学日蓮教学研究編『昭和定本日蓮聖人遺文』身延山久遠寺発行(初版・昭和二七年一〇月一〇日)八九頁

本文中は「開拓」と表記し、脚注に「拓_ニ拓_ニ」と記載されている。

本遺文集は、『観心本尊抄』と『曾谷入道殿許御書』は「開拓」と表記し脚注に「拓_ニ拓_ニ」と記載しているが、『観心本尊抄副状』では「開拓」とするのみで脚注に記載がない。

(5) 立正安国会編『日蓮大聖人御真蹟対照録』立正安国会発行(昭和四二年四月二八日)上巻八頁

「開拓」と表記されている。脚注の記載は無い。

本遺文集は、『観心本尊抄』『観心本尊抄副状』『曾谷入道殿許御書』共に「開拓」と表記している。

日蓮聖人遺文における「開拓」の文字について(庵谷行亭)

日蓮聖人遺文における「開拓」の文字について（庵谷行亨）

(4) ②立正大学日蓮教学研究編『昭和定本日蓮聖人遺文』身延山久遠寺発行（改訂増補版・昭和六三年一月三日）八九八頁

本文中は「開拓」と表記し、脚注に「拓ニ拓ニ」と記載されている。

本遺文集は、『観心本尊抄』『観心本尊抄副状』共に「開拓」と表記しているが、『曾谷入道殿許御書』では本文中は「開拓」と表記し、脚注に「拓ニ拓ニ」と記載している。

(4) ③立正大学日蓮教学研究編『昭和定本日蓮聖人遺文』身延山久遠寺発行（改訂増補第三刷〈訂正版〉・平成二年四月二八日）八九八頁

本文中は「開拓」と表記し、脚注に「拓ニ拓ニ」と記載されている。

本遺文集は、『観心本尊抄』と『観心本尊抄副状』は「開拓」と表記し、『曾谷入道殿許御書』では「開拓」と表記して脚注に「拓ニ拓ニ」と記載している。

(6) 米田淳雄編『平成新修日蓮聖人遺文集』連紹寺不軽庵発行（平成六年一月一三日）〈読み下し文〉三九七頁

「開拓」と表記されている。本書に脚注は無い。巻末の「校訂表」に記載は無い。

本遺文集は、『観心本尊抄』『観心本尊抄副状』『曾谷入道殿許御書』共に「開拓」と表記している。

(7) 阿部日顕監修『平成校定日蓮大聖人御書』第一巻 大石寺発行（平成一四年四月二八日）九二〇頁

本文中は「開拓」と表記し、脚注に「拓ニ拓ニ」と記載されている。

本遺文集は、『観心本尊抄』『観心本尊抄副状』『曾谷入道殿許御書』共に「開拓」と表記し、脚注に「拓ニ拓ニ」と記載している。

(8) ①立教開宗七百五十年慶讚會『日蓮宗電子聖典』日蓮宗宗務院發行(平成一四年二月八日)

「開拓」と表記されている。

本聖典は、『観心本尊抄』は「開拓」、『観心本尊抄副状』『曾谷入道殿許御書』は「開拓」と表記している。

(8) ②宗祖降誕八百年慶讚事業広報出版部会『日蓮宗新・電子聖典』日蓮宗宗務院發行(令和三年九月)

「開拓」と表記されている。

本聖典は、『観心本尊抄』では「開拓」、『観心本尊抄副状』『曾谷入道殿許御書』では「開拓」と表記している。

四 解説書の文字と解説

おもな解説書において当該文字がどのように表記し解説されているかについて確認したい。

1 『観心本尊抄』の文字と解説

おもな解説書における『観心本尊抄』真蹟第七紙表二行目の当該文字⁽⁵⁷⁾について確認すると次のとおりである。

(1) 望月歆厚著『日蓮聖人御遺文講義』第三卷 龍吟社發行(昭和八年)一六五頁

本文は「開拓」と表記し、「開き見る」と釈す。語註には「真蹟に拓に作る」とする。

(2) 山川智應著『観心本尊抄講話』浄妙全集刊行会發行(昭和四四年一月一日)(初版 昭和一四年)三四二頁⁽³⁸⁾

本文は「開拓」と表記し、「開拓く」と釈す。

(3) 清水龍山著『日蓮聖人御遺文全集講義』第一一巻上 大林閣(昭和一六年六月一日)一九〇〜一九一頁

日蓮聖人遺文における「開拓」の文字について(庵谷行亭)

日蓮聖人遺文における「開拓」の文字について（庵谷行亨）

本文は「開拓」と表記し、「開き見る」と釈す。

(4) 浅井円道著『観心本尊抄 仏典講座38』大蔵出版発行（昭和五七年一月七日）九三・二九二頁

本文は「開拓」と表記し、「開いて検しらべてみる」と釈す。語注に解説は無い。

(5) 茂田井教亨述『本尊抄講讀』中 山喜房佛書林発行（昭和六〇年一月六日）四〇一～四一一頁

本文は「開拓」と表記し、「開いて見る」と釈す。

(6) 渡辺宝陽監修『傍訳日蓮聖人遺文 観心本尊抄』四季社発行（平成一四年四月二五日）一四三～一四四頁

本文は「開拓」と表記し、「開いてみる」と釈す。語注は「開くこと」とする。

(7) 渡邊寶陽著『國寶『観心本尊抄』鑽仰』山喜房佛書林発行（平成二五年四月二八日）一二九～一三〇頁

本文の「釈文」（漢文表記）は「開拓」、「読み下し文」は「開拓」とし「かいたく」とふりがなを付している。

「鑽仰」（解説）では「開拓」とは「拓」（宗廟の本主（位牌）を安置する石室）を開きあらわすという意味と理解されます」としている。

2 『観心本尊抄副状』の文字と解説

おもな解説書における『観心本尊抄副状』真蹟第一紙七行目の当該文字³⁰について確認すると次のとおりである。

(1) 望月歎厚著『日蓮聖人御遺文講義』第三卷 龍吟社発行（昭和八年）三六八～三七〇五頁

本文は「開拓」と表記し、「披見」と釈す。語注には「開き、読み、講ずる、をいふ。即ち開卷披見である」とする。

本書は、『観心本尊抄』は「開拓」と表記し「開き見る」と釈し語注に「真蹟に拓に作る」とし、『観心本尊抄副状』も「開拓」と表記し「披見」と釈して語注に「開卷披見」としている。

(2) 山川智應著『観心本尊抄講話』浄妙全集刊行会発行（昭和四四年一月一日）五九九頁
本文は「開拓」と表記し、「開拓かれる」と釈す。

本書は、『観心本尊抄』『観心本尊抄副状』共に「開拓」と表記し「開拓く」と釈している。

(3) 清水龍山著『日蓮聖人御遺文全集講義』第一一卷下 大林閣発行（昭和一六年六月一日）四〇五～四〇六頁
本文は「開拓」と表記し、「開拓かる」「見開く」と釈す。

本書は、『観心本尊抄』『観心本尊抄副状』共に「開拓」と表記し、「開き見る」「見開く」と釈している。

(4) 浅井円道著『観心本尊抄 仏典講座38』大蔵出版発行（昭和五七年一月七日）二六八～二六九・三二九頁
本文は「開拓」と表記し、「かいゆう」と読みがなを付し、「開卷・披見させる」と釈す。語注には「開拓 諸本
みな『拓』を『拓』に改む。開卷披見」とする。

本書は、『観心本尊抄』では「開拓」、『観心本尊抄副状』では「開拓」と表記している。

(5) 茂田井教亨述『本尊抄講讀』下 山喜房佛書林発行（昭和六〇年一月六日）一三二一～一三三四頁
本文は「開拓」と表記し、「開かれる」と釈す。

本書は、『観心本尊抄』『観心本尊抄副状』共に「開拓」と表記し「開いて見る」と釈している。

(6) 渡辺宝陽監修『傍訳日蓮聖人遺文 観心本尊抄』四季社発行（平成一四年四月二五日）四二三～四二七頁
本文は「開拓」と表記し、「お見せ下さい」と釈す。語注は「開き読むこと。巻を開いて閲読させること」とす

日蓮聖人遺文における「開拓」の文字について（庵谷行亨）

日蓮聖人遺文における「開祐」の文字について（庵谷行亭）

る。

本書は、『観心本尊抄』『観心本尊抄副状』共に「開祐」と表記し、「開く」「開いてみる」「開き読む」「見せる」「開いて閲読させる」と釈している。

(7) 渡邊寶陽著『國寶『観心本尊抄』鑽仰』山喜房佛書林発行（平成二五年四月二八日）三九三～三九五頁

本文の「釈文」（漢文表記）は「開祐」、「読み下し」も「開祐」とし「かいたく」とふりがなを付している。「鑽仰」（解説）では、「祐とは宗廟オタマヤの位牌を安置する石室のこと。すなわち、日蓮聖人の心の奥深く受け継がれた久遠釈尊の究極の境地を、きちんと受け継ぐように！という遺命を確信されたものなのです」としている。

本書は、『観心本尊抄』では本文の「釈文」（漢文表記）は「開祐」、「読み下し文」は「開祐」とし「かいたく」とふりがなを付し、「鑽仰」（解説）では「開祐」とは「祐」（宗廟の本主（位牌）を安置する石室）を開きあらわすという意味と理解されます」とし、『観心本尊抄副状』では本文の「釈文」（漢文表記）は「開祐」、「読み下し」も「開祐」とし「かいたく」とふりがなを付し、「鑽仰」（解説）では「祐とは宗廟オタマヤの位牌を安置する石室のこと。すなわち、日蓮聖人の心の奥深く受け継がれた久遠釈尊の究極の境地を、きちんと受け継ぐように！という遺命を確信されたものなのです」としている。

3 『曾谷入道殿許御書』の文字と解説

おもな解説書における『曾谷入道殿許御書』真蹟第一二紙三行目の当該文字(8)について確認すると次のとおりである。

(1) 鈴木一成著『日蓮聖人御遺文講義』第七巻 龍吟社（昭和八年初版）日蓮聖人遺文研究会発行（昭和四〇年八月

二二日再版) 二二七～二二八頁

本文は「開拓」と表記し、「開いて」と釈す。語注に解説は無い。

(2) 高田恵忍著『日蓮聖人御遺文全集講義』第一四卷 平樂寺書店発行(昭和一〇年五月二二日初版) ピタカ発行

(昭和五三年六月一〇日復刻版) 八四～八七頁

本文は「開拓」と表記し、「開いて」と釈す。語注に解説は無い。

五 文字の意味

当該文字について、判読の可能性を有する各文字の意味を確認しておきたい。

「拓」は、辞典によると、「せき」「しゃく」と読み、①「いはい」「神位」「宗廟の本主」、②「いしびつ」「宗廟の本主を安置する石室」とある。⁽⁶¹⁾したがって、「開拓」は「かいせき」「かいしゃく」「かいじゃく」と読み、「宗廟の本主を安置する石室を開く」、「位牌を開く」「大切な宗室を開く」ことで、「大切なものを安置する石室の扉を開く」「大切なものを開き見る」などの意味であることが分かる。

「拓」は、辞典によると、「たく」と読み、①「正面に裂け目のある裳」、②「ひらく」「えりをひらく」、③「おおきい」「ひろい」「広く大きい」とある。⁽⁶²⁾したがって、「開拓」は「かいたく」と読み、「開く」「大きく開く」などの意味であることが分かる。

「開拓」は、辞典によると、「かいたく」と読み、①「あれ地をひらく」「山野をひらいて新しく田畑をつくる」、②「ひらく」「新しい分野を開く」とある。⁽⁶³⁾したがって、「開拓」は「新しく土地を開く」「新しい分野を開く」などの意

日蓮聖人遺文における「開拓」の文字について(庵谷行亨)

日蓮聖人遺文における「開拓」の文字について（庵谷行亨）

味であることが分かる。⁽⁶⁵⁾

なお、「開拓」の用例は『法華宗内証仏法血脈』と『立正観抄』に次のように見られる。

天台相承血脈云智者兼用「法華三昧旋陀羅尼」開拓一家教觀戸。偏不_レ同_レ他。已_三至_三于永平第九_一荊溪記主也。⁽⁶⁶⁾

泊_三于南岳天台_一復因_三法華三昧_一発_三陀羅尼_一開拓義門_一觀法周備。若_レ釈_三法華_一弥須_三曉_三了_三權実本迹_一方可_レ立_レ行。此經_レ独得_レ称_レ妙。方可_三依_レ此_一以立_三觀道_一。⁽⁶⁶⁾

いずれも「開く」の意味で用いられている。なお、『法華宗内証仏法血脈』は行学院日朝（一四二二～一五〇〇）の写本、『立正観抄』は身延三世日進（一二七一～一三三四）の写本が現存するが、日蓮聖人の真撰とすることについては疑義の説がある。⁽⁶⁷⁾

六 むすび

『観心本尊抄』『観心本尊抄副状』『曾谷入道殿許御書』の真蹟文に見られる当該文字は、各種の『日蓮聖人遺文集』『日蓮聖人遺文解説書』において様々に表記されている。主な表記は「開拓」「開拓」「開拓」の三種類である。判読が分かれた理由は、当該真蹟文字の偏を示偏・衣偏・手偏のいずれと判断するかの相違である。それだけ、当該真蹟文字の判読が困難であることを示している。

近年における『日蓮聖人遺文集』の多くは、小川泰堂編『高祖遺文録』を基としており、その系統を踏む加藤文雅編『日蓮聖人御遺文』・浅井要麟編『昭和_レ新修日蓮聖人遺文全集』・立正大学日蓮教学研究所編『昭和_レ定本日蓮聖人遺文』などは「開拓」と表記している場合が多い。いっぽう、国柱会の系統にある田中巴之助『再訂_レ照校類纂高祖遺文

録』・櫻井智堅監修『類纂日蓮聖人遺文集』・立正安国会編『日蓮大聖人御真蹟対照録』などは「開拓」と表記している場合が多い。

『日蓮聖人遺文集』の編纂・刊行が重ねられるなかで、日蓮聖人遺文の調査・研究が進展し、その成果が反映されるようになっていった。また他系統の『日蓮聖人遺文集』との比較照合も進み、しだいに判読結果の混淆も見られるようになっていったように思われる。同じ『日蓮聖人遺文集』が、同一文字を、出典箇所によって異なった表記をしている例もある。

日蓮聖人遺文の解説書は、原則的には依用する『日蓮聖人遺文集』に準拠することになる。したがって著者が依用する『日蓮聖人遺文集』によって相違が生じる。『日蓮聖人遺文集』の依用は著者の所属する組織の系譜によることが多い。「日蓮聖人遺文解説書」においても、『日蓮聖人遺文集』と同様に、大別すれば、日蓮宗系統と国柱会系統の特色が見られるのはこのためである。

『日蓮聖人遺文集』や『日蓮聖人遺文解説書』の刊行は、日蓮聖人の降誕・立教開宗・遠忌などの記念の年におこなわれていることが多い。日蓮聖人に対する報恩・慶讃の意図を込めた浄業であることが分かる。また、当時の信仰様態や歴史的状況などが『日蓮聖人遺文集』や『日蓮聖人遺文解説書』の編纂・刊行に影響を与えている場合もある。したがって、それぞれの編纂・刊行の背景などを考慮して拝読することも必要であろう。

漢字は表意文字であることから、近い表現であっても使用する文字によって意味が異なる場合がある。当該文字の判読として可能性のある「開拓」「開拓」「開拓」の三字の中では、「開拓」または「開拓」が望ましいように思われる。双方共に「開く」の意味であるが、「開拓」は「開拓」に比べると「極めて大切なものを開く」「宗教的幽玄性を

日蓮聖人遺文における「開祐」の文字について（庵谷行亨）

秘めた重要なものを開く」ことを示している。したがって、当該文字が使用されている日蓮聖人遺文の叙述内容を考慮すると、「開祐」がより相応しいように思われる。

また、「開拓」も「開く」の意味に用いられるが、本来は「新たな分野を開く」の意味であり、日蓮聖人遺文の文脈を考慮するとやや妥当性を欠くように思われる。

本稿は、当該文字の判読について結論を示すものではなく、いくつかの課題を挙げたにすぎない。今後の検討の参考になれば幸いである。

註

- (1) 『真蹟集成』第四卷三五頁七行目。『昭定』七二二頁二行目・真。
- (2) 『真蹟集成』第四卷一九頁二行目。『昭定』七〇八頁八行目・真。
- (3) 『法華』第一〇七卷第一二号二八頁。なお、中尾堯先生は『日蓮聖人と法華の至宝』第二卷（平成二四年二月一三日発行）の第一章「日蓮聖人真蹟の著書」においても『観心本尊抄』『観心本尊抄副状』の当該文字を「開祐」と表記されている（六六・七七頁）。
- (4) 『真蹟集成』第一卷二三頁三行目。『昭定』八九八頁一三行目。『昭定』八九八頁一三行目・真。
- (5) 『真蹟集成』第四卷一二頁二行目。『昭定』七〇八頁八行目・真。
- (6) ①『観心本尊抄』真蹟の第五紙表九行目（『真蹟集成』第四卷九頁九行目）②第六紙表二行目（『真蹟集成』第四卷一一頁二行目）③第七紙裏一七行目（『真蹟集成』第四卷一四頁一七行目）④第九紙表一行目（『真蹟集成』第四卷一七頁一行目）⑤第一四紙裏九行目（『真蹟集成』第四卷二八頁九行目）⑥第一四紙裏一二行目（『真蹟集成』第四卷二八頁一二行目）⑦第一六紙表三行目（『真蹟集成』第四卷三二頁三行目）⑧第一七紙表七行目（『真蹟集成』第四卷三三頁七行目）。なお、松本慈恵編『日蓮聖人書体字典』二二六三頁参照。

- (7) 『観心本尊抄』真蹟の第四紙表一〇行目（『真蹟集成』第四卷七頁一〇行目）。
- (8) 『観心本尊抄副状』真蹟の第一紙七行目（『真蹟集成』第四卷三五頁七行目）。
- (9) 松本慈恵編『日蓮聖人書体字典』二九九頁参照。
- (10) 松本慈恵編『日蓮聖人書体字典』二九八頁。
- (11) 川澄勲編『仏教古文書字典』一三九頁。
- (12) 川澄勲編『日蓮大聖人用字集』二〇四頁。
- (13) 北山本門寺蔵。松本慈恵編『日蓮聖人書体字典』一六三頁参照。
- (14) 『真蹟集成』第四卷三五頁七行目。『昭定』七二二頁二行目・真。
- (15) ①『観心本尊抄』真蹟の第三紙表一三行目（『真蹟集成』第四卷五頁一三行目）②第五紙裏一六行目（『真蹟集成』第四卷一〇頁一六行目）③第五紙裏一七行目（『真蹟集成』第四卷一〇頁一七行目）④第一四紙裏二行目（『真蹟集成』第四卷二八頁二行目）。
- (16) 『観心本尊抄副状』真蹟の第一紙六行目（『真蹟集成』第四卷三五頁六行目）。
- (17) 松本慈恵編『日蓮聖人書体字典』二六四頁参照。
- (18) 『観心本尊抄副状』真蹟の第一紙七行目（『真蹟集成』第四卷三五頁七行目）。
- (19) 川澄勲編『仏教古文書字典』一三九頁。
- (20) 『観心本尊抄』真蹟の第一四紙表三行目（『真蹟集成』第四卷二七頁三行目）。
- (21) 松本慈恵編『日蓮聖人書体字典』一六三頁参照。
- (22) ①『観心本尊抄』真蹟の第三紙表二行目（『真蹟集成』第四卷五頁二行目）②第三紙表三行目（『真蹟集成』第四卷五頁三行目）③第三紙表四行目（『真蹟集成』第四卷五頁四行目）。
- (23) 松本慈恵編『日蓮聖人書体字典』一三九頁参照。
- (24) 『真蹟集成』第一卷一二頁三行目。『昭定』八九八頁一三行目。
- (25) 『観心本尊抄』真蹟の第一二紙表一三行目（『真蹟集成』第四卷三三頁一三行目）。
- (26) ①『観心本尊抄』真蹟の第一三紙裏七行目（『真蹟集成』第四卷二六頁七行目）②第一四紙表一五行目（『真蹟集成』第

日蓮聖人遺文における「開拓」の文字について（庵谷行亨）

日蓮聖人遺文における「開祐」の文字について（庵谷行亨）

- 四卷二七頁一五行目）③第一四紙表一七行目（『真蹟集成』第四卷二七頁一七行目）。
- (27) ①『曾谷入道殿許御書』真蹟の第一九紙四行目（『真蹟集成』第一卷二〇頁四行目）②第二四紙三行目（『真蹟集成』第一卷二五頁三行目）。
- (28) ①『曾谷入道殿許御書』真蹟の第二二紙七行目（『真蹟集成』第一卷二二頁七行目）②第二二紙一行目（『真蹟集成』第一卷二三頁一行目）③第二四紙三行目（『真蹟集成』第一卷二五頁三行目）。
- (29) ①『曾谷入道殿許御書』真蹟の第四二紙（下卷第一六紙）八行目（『真蹟集成』第一卷四三頁八行目）②第四二紙（下卷第一六紙）一五行目（『真蹟集成』第一卷四三頁一五行目）③第四四紙（下卷第一八紙）二行目（『真蹟集成』第一卷四五頁二行目）。
- (30) 松本慈恵編『日蓮聖人書体字典』二六三～二六六頁参照。
- (31) 『観心本尊抄』真蹟の第四紙表一〇行目（『真蹟集成』第四卷七頁一四行目）。
- (32) ①『観心本尊抄』真蹟の第四紙八行目（『真蹟集成』第一卷五頁八行目）②第一一紙九行目（『真蹟集成』第一卷一二頁九行目）③第一三紙一〇行目（『真蹟集成』第一卷一四頁一〇行目）④第一三紙一行目（『真蹟集成』第一卷一四頁一行目）⑤第一四紙一〇行目（『真蹟集成』第一卷一五頁一〇行目）⑥第一九紙六行目（『真蹟集成』第一卷二〇頁六行目）
- ⑦第二二紙六行目（『真蹟集成』第一卷二二頁六行目）。
- (33) 松本慈恵編『日蓮聖人書体字典』二九八～二九九頁参照。
- (34) 第七紙表二行目。『昭定』七〇八頁八行目・真。
- (35) 『昭定』七〇八頁・真。
- (36) 渡邊寶陽著『國寶「観心本尊抄」鑽仰』には「法華経」方便品第二の中、「諸法の中の悪を断ずる」という経文こそ、釈尊の大切な内意として説かれているものであり、その釈尊の深意を開き見るといのが、この「開祐」という語の重要な意味であるとする解釈が、あらためて認識されているのです（二三〇頁）と解説されている。
- (37) 『昭定』七〇九頁・真。
- (38) 本遺文集は、明治三五年（一九〇二）の「日蓮聖人立教開宗六五〇年」を記念して、明治三七年（一九〇四）に刊行されたもので、小川泰堂の『高祖遺文録』を底本に、真蹟・写本との校合をしている。その後、訂正再版・新発見遺文の増

補をおこない繰り返し出版された。重版時における文字の変遷については各版を具体的に確認する必要がある。その後に行された『昭和定本日蓮聖人遺文』は本遺文集を底本にして編纂された。

(39) 本遺文集は、大正三年（一九一四）一月三日に刊行された『類纂高祖遺文録』を大正六年（一九一七）に再訂照校して刊行されたもので、第六版本である。『類纂高祖遺文録』は、日蓮聖人遺文を「主要篇」「宗義篇」「事跡篇」「信行篇」「勸誡篇」「教解篇」「対判篇」「附雑篇」に類別して編集しており、底本は小川泰堂居士の『高祖遺文録』である。

(40) 本遺文集は、大正三年に刊行された『類纂高祖遺文録』を、「日蓮聖人立教開宗七五〇年」と「本化妙宗聯盟創立五〇周年」を記念して平成一二年（二〇〇〇）に再版されたものである。再版にあたり漢文は読み下し文に改められている。『類纂高祖遺文録』は繰り返し版を重ねており、『再訂照校類纂高祖遺文録』と共に、重版時における文字の変遷については各版を具体的に確認する必要がある。

(41) 本遺文集は、「日蓮聖人六五〇遠忌」を記念して、昭和九年（一九三四）に刊行されたもので、『日蓮聖人御遺文』を底本に、新加・増補、写本・刊本との校合などをおこなっている。漢文体は読み下し文に改め、文章にふりがなを付している。

(42) 『昭和定本日蓮聖人遺文』は、昭和二七年（一九五二）の「日蓮聖人立教開宗七〇〇年」記念慶讃事業の一環として企画編集されたもので、『日蓮聖人御遺文』を底本にしている。第一巻が昭和二七年（一九五二）一月一日、第二巻が昭和二八年（一九五三）四月二五日、第三巻が昭和二九年（一九五四）二月一日、第四巻が昭和三四年（一九五九）一月二八日にそれぞれ身延山久遠寺から刊行された。本遺文集は、日蓮聖人遺文を集大成したもので、第一・二巻に第一輯正篇として著述・消息類、第三巻に第二輯統篇として真偽の問題がある著述・消息類、第三輯として図録、第四輯として断簡、第五輯として講記、第六輯として目録、および書名索引、対告別消息索引、第四巻に正篇新加、親写本奥書、図録新加、断簡新加、正篇断簡新加、および索引がそれぞれ収録されている。このように本遺文集は日蓮聖人遺文の全体を網羅する画期的な遺文集として編纂された。また、文献学的研究成果に立脚して編纂されており、各遺文について次のような事項が記載されている。①異称、②祖寿、③系年、④著作地、⑤対告者、⑥真蹟（現存・紙数、所蔵）、⑦写本、⑧刊本、⑨真蹟・写本・刊本などの諸本の校異、⑩注釈書、⑪諸遺文集の頁数などである。このように『昭和定本日蓮聖人遺文』は学術的研究成果を網羅し、新発見遺文を増補として追加収録するなど信頼性の高い遺文集である。

日蓮聖人遺文における「開拓」の文字について（庵谷行亨）

日蓮聖人遺文における「開拓」の文字について（庵谷行亨）

(43) 本遺文集は、昭和二十七年（一九五二）から三十二年（一九五七）にかけて刊行された『日蓮大聖人御真蹟』に基づいて、真蹟の記述のとおり活字におこして刊行されたもので、上・中・下の三巻から成る。日蓮聖人真蹟遺文解説の基本文献である。

(44) 『昭和定本日蓮聖人遺文』は、初版刊行後、昭和四〇年（一九六五）に浅井圓道先生の尽力によって各巻の「正誤表」が作成された。その後、昭和四三年（一九六八）に新発見遺文の増補（第四巻に増補）がおこなわれ、さらに昭和六三年（一九八八）一〇月一三日に改訂増補版が刊行された。改訂増補版では①真蹟現存遺文の照合確認と必要に応じての訂正、②さらなる新発見遺文の第四巻への増補、③「正誤表」の本文への組み入れ、④訂正等の頁内処理、がおこなわれた。そのため、訂正内容によっては一行の文字数、一頁の行数に変更の生じた箇所もある。初版刊行後の、新発見遺文の重ねての増補や「正誤表」の本文への組み入れによって、いっそう充実した『日蓮聖人遺文集』となった。

(45) 『昭和定本日蓮聖人遺文』は昭和六三年の改訂増補版刊行後、立正大学日蓮教学研究所において継続的に確認作業がおこなわれ、平成二年（一九九〇）までに確認された訂正箇所正誤表が、平成三年（一九九一）三月一〇日発行の『日蓮教学研究所紀要』第一八号に掲載された。加えて平成一二年（二〇〇〇）までに確認された訂正箇所正誤表が、平成一三年（二〇〇一）三月一〇日発行の『日蓮教学研究所紀要』第二八号に掲載された。これらの訂正は、平成一二年四月二八日に刊行された『昭和定本日蓮聖人遺文』改訂増補第三刷に反映された。現時点においては、これが『昭和定本日蓮聖人遺文』の最新の版となっている。

(46) 本遺文集は、収録遺文を、真蹟現存・曾存遺文等を中心とし、主に『日蓮聖人真蹟集成』（法蔵館発行）『昭和定本日蓮聖人遺文』（身延山久遠寺発行）『日蓮大聖人御真蹟対照録』（立正安国会発行）をもとにして編集されたものである。漢文体は読み下し文にし、原文を巻末に付している。文章に段落を設け、主な漢字にふりがなを付すなど読みやすい編集になっている。底本の訂正箇所については巻末に「校訂表」が付されている。

(47) 本遺文集は、昭和四一年（一九六六）に刊行された『昭和新定日蓮大聖人御書』（大石寺発行）を底本とし、平成一四年（二〇〇二）に「宗旨建立七五〇年」慶祝記念事業の一環として刊行されたものである。遺文の真偽や系年・対告者など、近年の遺文研究成果を踏まえて編纂されている。ただし、編纂の趣旨が大石寺教学の「血脈相伝」にあることから、他門流との間に遺文読解上の相違点があることに留意が必要である。『昭和新定日蓮大聖人御書』からの改編時における文字

の変遷については具体的に確認する必要がある。

- (48) 『日蓮宗電子聖典』は、「日蓮聖人立教開宗七五〇年」記念慶讃事業の一環として企画編集されたもので、平成一四年(二〇〇二)に立教開宗七五十年慶讃会から刊行された。『日蓮宗電子聖典』所収の『日蓮聖人遺文集』は「昭和定本日蓮聖人遺文」と渡邊宝陽氏・小松邦彰氏編『日蓮聖人全集』全七巻(平成四年(一九九二)～八年(一九九六)刊行)(株)春秋社発行)である。身延山久遠寺・立正大学日蓮教学研究所(株)春秋社の協力と神奈川県第一部日蓮宗青年会によるNファイル提供などの支援、および関係者の尽力によって刊行された。日蓮聖人遺文集電子版の刊行によって、日蓮聖人遺文の検索が容易となり、日蓮聖人遺文の信解増進・研究進展・布教・伝道の充実に多大な便益をもたらすこととなった。
- (49) 『日蓮宗 新・電子聖典』USBメモリ版は、令和三年(二〇二二)の「宗祖降誕八〇〇年」慶讃事業の一環として企画編集されたもので、令和三年に日蓮宗宗務院伝道部宗祖降誕八百年慶讃事業広報出版部会から刊行された。収録遺文は平成一四年刊行『日蓮宗電子聖典』所収の『日蓮聖人遺文集』(『昭和定本日蓮聖人遺文』『日蓮聖人全集』)と同じであるが、改めて書籍版『昭和定本日蓮聖人遺文』との照合・確認がおこなわれている。これによってできるかぎりの誤字(入力ミス)などの修正がはかられた。
- (50) 第一紙七行目。『昭定』七二二頁二行目・真。
- (51) 『昭定』七二二頁二行目・真。
- (52) 『昭定』一四四六頁・写。
- (53) 末法に弘通されるべき「大法」については拙稿「日蓮聖人における仏法の弘通」(三)(『身延論叢』第二六号)参照。
- (54) 第一二紙三行目。『昭定』八九八頁二三行目・真。
- (55) 『昭定』八九八頁～八九九頁・真。
- (56) 空海の『教王経解題』には「龍猛菩薩、南天の鉄塔の中より涌出するところの如来秘密藏の根本なり」(『弘法大師全集』第一輯七一九頁)と、「涌出」とある。また『日本真言宗事』には「教王経開題云金剛頂経及大日経並是龍猛菩薩南天鉄塔中所涌出」。不空三蔵要決云其大経本阿闍梨云経映広長如林。厚四五尺。有無量頌。在南天竺界鉄塔之中。付法伝云鉄塔者是非三人功所造。如来神力所造也。大日経云大日遍照尊微塵為衆生一八相成三示現衆生同受苦文」(『昭定』二二九八～二二九九頁)とある。「涌出」は「涌出」の誤字と思われる。本遺文は真蹟不現存である。また、「南天竺の鉄塔」に

日蓮聖人遺文における「開拓」の文字について(庵谷行亨)

日蓮聖人遺文における「開拓」の文字について（庵谷行亨）

ついでには『開目抄』に「此真言は南天竺の鉄塔の中の法華經の肝心の真言也」（『昭定』五七〇頁・曾）と見える。

(57) 第七紙表二行目。『昭定』七〇八頁八行目・真。

(58) 本書は、昭和一四年（一九三九）の初版本（龍吟社発行）に著者が校訂・追補した校訂本に基づいて、昭和四四年（一九六九）に浄妙全集刊行会から再刊された。

(59) 第一紙七行目。『昭定』七二二頁二行目・真。

(60) 第一二紙三行目。『昭定』八九八頁二三行目・真。

(61) 諸橋轍次・鎌田正・米山寅太郎著『広漢和辞典』中卷一三八七頁。大修館書店。

(62) 諸橋轍次・鎌田正・米山寅太郎著『広漢和辞典』下卷五九一〜五九二頁。大修館書店。

(63) 諸橋轍次・鎌田正・米山寅太郎著『広漢和辞典』下卷一〇六〇頁。大修館書店。

(64) 立正大学日蓮教学研究所編『日蓮聖人遺文辞典』歴史篇（身延山久遠寺発行）は「開拓」について「もともとの意味は、山野・荒地を切り開いて耕地や敷地にすること。だが、転じて新しい分野、進路などを開く意となり、さらに真法門の深意を体得することを意味する」（一六三頁）と解説している。

(65) 『法華宗内証仏法血脈』『昭定』六九七頁。

(66) 『立正観抄』『昭定』八四五頁。

(67) 浅井要麟編『昭和新修日蓮聖人遺文全集』別卷二一八・二二三頁。浅井要麟著『日蓮聖人教学の研究』一九七頁。

日蓮聖人真蹟写真の掲載については、法華經寺様の特別のご配慮をいただいた。深く感謝申し上げる所である。

- 一 日蓮聖人遺文は立正大学日蓮教学研究所編『昭和定本日蓮聖人遺文』（身延山久遠寺発行）によった。
- 二 日蓮聖人遺文の真蹟現存等の状況については次のように表記した。

真 真蹟現存遺文

曾 真蹟曾存遺文

断 真蹟断片現存遺文

写 直弟写本現存遺文

三 略称

〔昭定〕 立正大学日蓮教学研究所編『昭和定本日蓮聖人遺文』（身延山久遠寺発行）

〔真蹟集成〕 日蓮聖人真蹟集成法蔵館編集部編『日蓮聖人真蹟集成』（法蔵館発行）

〈キーワード〉 日蓮聖人遺文、観心本尊抄、観心本尊抄副状、曾谷入道殿許御書、開祐、開拓、開拓

日蓮聖人遺文における「開祐」の文字について（庵谷行亨）